

漫画『馬田行啓と小野光洋』

―教育に情熱を燃やした文教大学学園の創立者たち

第3章 「女性の職業人育成

女子教育に新たな学びの場」解説

一 女子教育と小野光洋

前章で述べたように、大正期に女性の就業機会が増加し、働く女性、いわゆる「職業婦人」が誕生した。これ以前、女性の職業と言えば教師あるいは看護婦あったが、大正時代にはバス・ガール(図1)やタイピスト(図2)、百貨店の店員、飲食店のウェイトレス、一九三〇年代になるとエア・ガールなども登場した。

(図1) 増田美子、難波知子『ビジュアル 日本の服装の歴史 ③明治時代〜現代』ゆまに書房、二〇一八年、三六〜三七ページ。

(図2) 日本近代史研究会 編『画報近代百年史』第一集(一九二三―一九二六)、国際文化情報社、一九五二・国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2456392> (二〇二四年八月七日参照)

(図3) 一九三九(昭和一四)年「大日本航空(国策航空機会社)の旅客機内」 <https://jao2100.org/entry/detail/042275.html> (二〇二四年八月七日参照)



図1



図2



図3

このように、女性が社会において活躍するようになると、就業前の女子教育への関心が次第に高まっていった。前章の立正大学社会問題研究会との関係で言えば、小野と阪本は、研究会の創立一〇周年を記念し、教育事業の実施を馬田に提案した。なかでも、女子教育および社会事業への高い関心を示していたのである。なぜなら、かつて小野は姉と一緒に学校設立を夢みていたが、姉の死去により頓挫した過去があり、その実現は小野の悲願でもあり、その熱量には並々ならぬものがあつた(漫画本編三九ページ)。



一九二七(昭和二)年七月、馬田が顧問を務める立正大学社会問題研究会は、「日蓮主義」にもとづく社会・保育・教育事業を計画した(文教大学学園創立六十年史編集委員会『文教大学学園創立六十年史』一九八八年、三〜四ページ)。馬田の社会運動への原動力は、「日蓮教学の実践性」と言われ、仏典や訓話を伝えるだけでは不十分と判断し、社会の変化に合わせて柔軟に対応する実行力そのものであったのである(立正大学史編集委員会『立正大学の百四十年』、二〇一二年、二二ページ)。

ただし、計画の実現には馬田以外の力が不可欠であった。馬田、小野、阪本に加え遠山潮徳、斎川純行などの諸氏が女子教育事業の実現のため日蓮主義普及会、立正婦人会に働きかけ、その一環として「裁縫塾」の開設を模索するのであった(立正学園三十五年史編集委員会『立正学園創立三十五年史』一九六一年、九ページ)。

二 立正学園の誕生 桐ヶ谷校地の時代

(一) 建学の精神Ⅱ「立正精神」

馬田と小野が教員と学生の立場の違いを超えて、一九二七（昭和二）年以降に学校を設立したが、名称には「立正」の二文字が含まれていた。名称の由来は、建学の精神と深く関係していた。学園の建学の精神は「立正精神」である（漫画本編四五ページ）。

「立正精神」の「立正」は日蓮が著した「立正安国論」に由来し、「立正」の意味は「正しい仏教の教え」とされる。馬田と小野は、宗教を基盤とする教育をめざし、「立正精神」を建学の精神とさだめた（建学の精神推進会議「資料三 人間愛について」二〇〇七年九月二七日）。なお、建学の精神は、その後「人間愛」に読み替えられており、設置校の学則のなかに人間愛の精神にもとづく教育理念が盛り込まれることとなる（文教大学学園創立九〇周年史編集委員会『文教大学学園創立九〇周年史』二〇一七年、一〇一〜一二ページ）。

(二) 文教大学学園の原点 立正幼稚園と立正裁縫女学校の設立

建学の精神に基づき、一九二七（昭和二）年一〇月一七日、立正幼稚園と立正裁縫女学校が東京府荏原郡大崎町桐ヶ谷（現・東京都品川区）に設立された（前掲『文教大学学園創立六十年史』、三〜四ページ）。

校地は、桐ヶ谷駅に近い場所に位置していた。桐ヶ谷駅は、池上電気鉄道（現・東急池上線）の大崎広小路駅と戸越銀座駅の

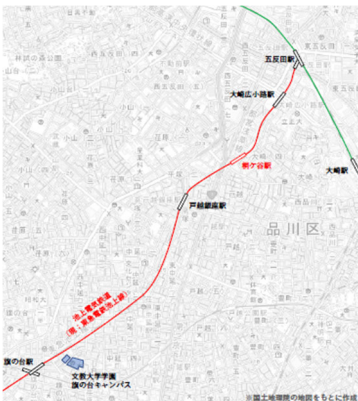


図 4

中間に位置し、現在は廃駅となっている（図 4・池上線路線図 現在過去比較、本学作成）。

(三) 設立関連法令

幼稚園については、一九二六（大正一五）年四月に「幼稚園令」（勅令第七四号）により定められた。

第一条 幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス

第二条 市町村、市町村学校組合及町村学校組合ハ幼稚園ヲ設置スルコトヲ得（後略）

第三条 私人ハ本令ニ依リ幼稚園ヲ設置スルコトヲ得

大蔵省印刷局「編」『官報』一九二六年四月二二日、日本マイクロ写真、大正一五年、国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2956247/1/2>（二〇二四年八月七日参照）

つまり、第一条は、幼稚園は保育を教育の目的とすること、第二条および第三条は幼稚園の設置にかかわる資格が明記されていたのである。

裁縫女学校については、校名から類推すると、一九二一（大正一〇）年一月一三日に公布された「職業学校規程」（省令第三号）に準拠した学校である可能性が考えられる。

第一条 職業学校ノ修業年限ハ二年以上四年以内トス（後略）

第二条 職業学校ニ入学スルコトヲ得ル者ノ資格ハ年齢十二年以上ニシテ、学力尋常小学校卒業程度以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第五条 職業学校ノ学科ハ裁縫、手芸、割烹、写真、簿記、通信術其他
特種ノ職業ニ付之ヲ定ムヘシ

大蔵省印刷局「編」『官報』一九二一年一月一三日、日本マイクロ写真、
大正十年・国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2954647/1/2>（二〇二四年八月七日参照）

このように、第一条は修業期間、第二条は入学資格、第五条は、職業学校
が教授する科目が成文化されていた

（四）小野光洋の熱量

立正裁縫女学校にかかわる記録については、公文書などは、ほとんど確認
できないが、新聞記事には次のような回顧がみられる（漫画本編四二ページ）

昭和二年に立正大学社会問題研究会で社
会事業としてセツルメントや幼稚園設立
案が持ち出された、斎川純行氏からこの話
をきかされた病床にあつた小野さんは体
温機を叩きつけて「僕がやらう」と立ち上
がり、池上沿線の桐ヶ谷駅前に二、三のマ
ツチ箱のような校舎をもつた七十坪の裁
縫学校〔注・立正裁縫女学校を指す〕を設
立した

（「明朗人生案内 経営難の苦境も根と熱で
克服 立正大学の小野さん」『東京朝日新聞』
一九三六（昭和一一）年一〇月一日朝刊、
第一二面）



新聞記事の「二行目における内容は、従前指摘した内容と大きな齟齬が
見られない。すなわち、社会問題研究会が記念事業の一環として教育事業を
着手することを示している。そのほか、病床にあつた小野が、体温計を叩き
つけて学校設立に立ち上がるという、本書の最も熱い場面である。

このとき小野が使っていたのは、引用文では「体温機」と記載され、おそ
らくは水銀体温計のことであろう。すでに、一九二〇年代には、病院のみな
らず家庭に体温計が普及し、体温を計測し健康を管理する考え方も定着して
いたと言われている。

三 財団法人化および校名変更の動き

（一）立正職業女学校の計画概要

一九二八（昭和三）年三月、財団法人立正学園および立正女子職業学校の
設立が認可された。立正裁縫女学校が発展的に解消し誕生したのが立正女子
職業学校であり、すでに一九二七（昭和二）年一二月頃に設立の動きは始ま
っていた。同年一二月二七日、立正学園理事長として馬田行啓は水野錬太郎
文部大臣に「立正女子職業学校設立認可申請書」を提出している（「立正学
園高等家政女学校」国立公文書館所蔵『設置廃止（位置変更、改称）に関す
る許可文書・職業学校・東京都』昭四七文部〇二六七〇一〇〇）

ここで初めて立正女子職業学校の名称が登場し、校地は桐ヶ谷とし、定員
は本科一部二〇〇名、本科二部一五〇名、裁縫科一〇〇名、合計四五〇名と
し、開校は一九二八（昭和三）年四月を予定していた。翌年には校地が旗の
台に移転するが、当初の計画では桐ヶ谷駅の両側に校地を設け、木造二階建
て校舎を建設する計画であった。

しかし、教室の収容人数は二二〇名、定員の五割程度にとどまり、生徒の
修学環境としては必ずしも十分とは言えず、学園側は早くから移転を模索し
ていたと考えられる。

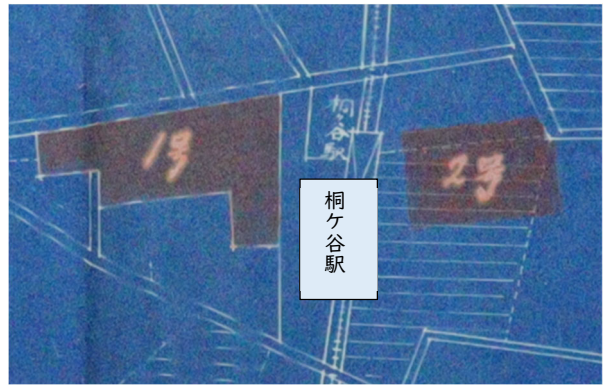


図5

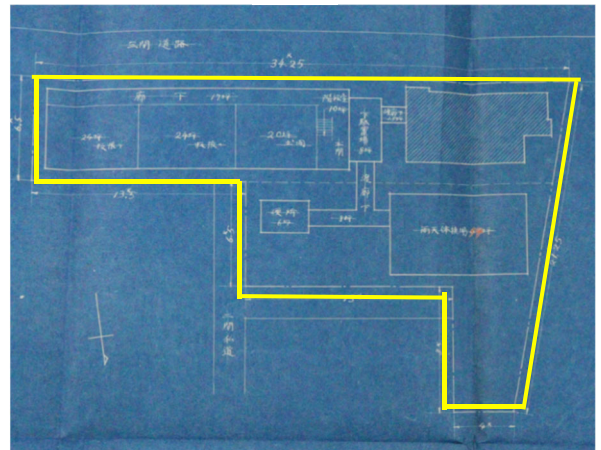


図6

(図5)(図6) 前掲「立正女子職業学校設立認可申請書」所収

そのほか、修業年限は本科一部が四年、本科二部が三年、裁縫科が二年とされ、本科一部と裁縫科は尋常小学校の卒業生、本科二部は高等小学校の卒業生を対象としていた。カリキュラムは国語や修身※のほか「和服裁縫」、「編物」、「刺繍」、「手芸」、「家事」などが設定され、現代的に言えば「家庭科」を中心に教授する学校であったことが確認できる。

※旧学制下の小学校・国民学校などで、道徳教育を行なうために設けられていた教科の名。教科は昭和二〇年（一九四五）連合軍総司令部の指令によって廃止（『日本国語大辞典』より）。

(二) 職業婦人の登場と教育機関の整備

女子教育に特化した職業学校を設立した理由について、「立正女子職業学校設立認可申請書」においては次のように述べていた。

近時文化ノ発展ハ女子ノ向学心ノ向上ヲ促シ、女子ニシテ中等教育ヲ受ケントスルモノ年次其ノ数ヲ増加シツツアリ、然レ共一般の普通教育ヲ施ス高等女学校ノ設置ハ相当ノ数ニ上リ、之カ需要ヲ充シツツアルノ感アレトモ實際的教育ヲ施ス実業学校ノ設置ノ少キハ遺憾トスル所ナリ

而モ時世ハ各種商工業ノ以上ナル発展ヲ促シ、分業ノ傾向ハ日ト俱ニ細ヲ極メ且ツ彼ノ大戦以来単ニ男子ノミノモノトシテ是等職業ハ分業ヲ発展ニ縦〔従〕テ自然婦人ノ手ニ移リ各種実業ニ従事スル職業婦人ナル一階級ヲ造ルニ至レリ、此処ニ於テカ生活ノ必須条件タル衣類ノ調製ノ如キモ必須専門家ノ手ニ委セラムトス

このように、中等教育への進学希望者が増加するとともに、高等女学校の設置数も相当数に上る一方で、馬田は「実際教育」、すなわち「実業教育」や「職業教育」を施す教育機関が少ないことを理由にあげている。

そのほか、「職業婦人」が、「一階級」を形成したとも言及し、それだけ女性の社会進出が急速にすんだことを比喩的に表現している。つまり、馬田は、女子に知識や技能を習得させ、職業人を育成するという目標を実現するため、職業学校の設立に注力していくのである。

四 立正学園の発展 旗の台校地の時代

(一) 設置校の増加

一九二九（昭和四）年、立正女子職業学校は、立正学園女学校と改称された。校地も桐ヶ谷から東京府荏原郡荏原町中延（現・東京都品川区旗の台）に、同年に移転している。

さらに、一九三二（昭和七）年、立正学園は、立正学園高等女学校と立正学園実科女学校（一九三六（昭和一一）年に廃校）を併設した。校長には馬

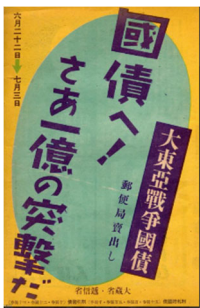
田が就任している。高等女学校の設立にともない、職業学校の系譜を引く立正学園女学校は名称の混乱を避けるため、一九三二（昭和七）年に立正学園高等家政女学校に改称した。小野は、教頭として馬田を支える役割を果たし、学園の発展に寄与するのであった。本来、馬田は優秀な研究者であると同時に、教育者でもあり、学校経営の点においても大いに力を発揮した（漫画本編四八ページ）。

その結果、財団法人の創設以来、わずか四年という短期間のうちに、立正学園は女学校三校、法人化以前に設置された幼稚園も含めると四つの教育機関を設置し、戦後の総合学園の起源が、ここに誕生したのである。

当初、立正裁縫女学校が七五名から始まったが（前掲『立正学園創立三十五年史』、一〇ページ）、従前指摘したように設置校の増加にともない、立正学園高等女学校の生徒数だけでも、一九三六（昭和一一）年に七五〇名、一九三八（昭和一三）年に一〇〇〇名、一九四〇（昭和一五）年に一二五〇名と年々増加していった（『立正学園高等女学校』国立公文書館所蔵『高等女学校台帳・関東・東京（法人立）』昭五九文部〇二五七四一〇〇）。

（二）晩年の馬田行啓

一九三七（昭和一二）年七月に日中戦争が勃発すると、第一次近衛文麿内閣は、「挙国一致・尽忠報国・堅忍持久」をスローガンに「国民精神総動員運動」を開始した。これにより、各地では勤労奉仕、国防献金、増産運動、公債購入などが行



われた。

（図7）一九四二（昭和一七）年「大東亜戦争・戦時国債」

<https://jqa2100.org/entry/detail/059444.html>（二〇二四年八月七日参照）

戦時中に立正学園が、どのように戦争と向き合ったのかを示す記録は、ほとんど見られない。ただし、『馬田行啓先生追憶抄』（一五〜一六ページ）においては、馬田は、東京府より国民精神総動員運動の委員を委嘱され、一九三八（昭和一三）年〜一九三九（昭和一四）年に日本軍の慰問のため中国や満洲に赴いている。太平洋戦争が開戦した一九四一（昭和一六）年には、馬田は日蓮宗宗務総監に就任し、戦時下の宗教統制下において、苦渋の選択を強いられながら宗門存続と学校を守るため、東奔西走するのであった。戦争末期には、児童生徒の生命を守るため約二〇〇〇名を疎開させている。しかし、校地二〇〇〇坪は空襲により、ほぼ焼失のであった。

一九四五（昭和二〇）年八月に日本は終戦を迎え、馬田と小野は学校の再建に取り組むこととなるが、その矢先に同年一月十七日、馬田は死去した。小野にとっては突然の別れであり、創立者を失った喪失感はいくら知れないものがあった（漫画本編五二ページ）。



第三章は、馬田が亡くなったシーンで幕を閉じます。馬田と小野が社会問題研究会にて邂逅し女子教育への情熱から意気投合し、立正幼稚園と立正裁縫女学校を一九二七（昭和二）年に設立するに至ります。その後も、時勢を捉えて馬田は、職業婦人の登場とともに職業学校への改組や、高等女学校を新設し、女性の社会進出を支える教育機関の拡充を図りました。途半ばで馬田は亡くなりますが、第四章においては、馬田の遺志を継いだ小野が、戦後に立正学園を総合学園として発展させることが描かれています。